

上人はいかに自身の来迎理解を深めていかれたのか。『浄土真要鈔』では十四の問答が挙げられ、その中来迎に関する記述が見られるのは、第一・二・七・八・九・十・十一・十三の問答である。内容を整理するならば、

諸行の行人（第十九願の機）——来迎——胎生辺地の往生——

方便

他力真実の行人（第十八願の機）——得生——真実報土の往生——

真実

↓来迎にあづかる〓報仏の来迎〓摂取不捨の義
と示す事ができよう。

『浄土真要鈔』に見られる存覚上人の来迎思想は、親鸞聖人の来迎思想を承けた第十九願の行者の利益として捉えている。なおかつ得生を挙げ第十八・十九願との比較において来迎は方便であると定義している。しかし親鸞聖人において推し進められた、他力としての来迎という理解は存覚上人では見られない。あくまで存覚上人の立場は、法然聖人の平生の重視と親鸞聖人の来迎否定の思想が背景にあると考えられ、それが来迎は方便という、親鸞聖人においてみられた他力を基底とした来迎思想には言及せず、法然聖人の来迎思想にやや傾倒したと考えられる。

尚、この研究は平成二十年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚深の謝意を表したい。

中世武士と一遍・時衆の周辺

大山 眞一

昨年度の日本宗教学会第六七回学術大会においては、殺生による罪業観、罪障観に起因する中世武士の生死観を、鎌倉仏教の祖師である法然（一一三三—一二二二）・日蓮（一二二二—一二八二）との交渉から考察した。法然の生死観を来世的死生観、日蓮の生死観を現世的死生観と定義づけ、中世武士の信仰の選択肢が「来世」か「現世」か、来世的死生観か現世的死生観の二者択一を迫られたことを検証した。今年度の第六八回学術大会においては、その二者択一の一方の選択肢である現世的死生観についての論考を深めたい。浄土思想の究極の姿を日本浄土教の思想的変遷に求め、特に一遍上人の思想である究極の現世的死生観に言及し、一遍没後の時衆と武士の交渉から中世武士の死生観について発表する。

日本浄土教の変遷は、浄土宗（法然）から、真宗（親鸞）、そして時宗（一遍）という宗派を超えた思想的変容の過程を辿ることができ。しかしながら、同じ浄土教系の思想でも、一遍には法然、親鸞と異なる独特な思想がある。十一不二の頌（思想）である。その思想は一遍が絶対者（阿弥陀仏）と個人の関係を不二と捉え、「南無阿弥陀」という名号に全てを収斂させた点に大きな特徴がある。換言するならば、その一遍の思想は法然の来世的死生観、親鸞の来世的死生観を経た究極の現

第8部会

世的生死観とすることができよう。十一不二の偈の中でも、国界平等坐大会（阿弥陀国と衆生界は一つのものであり、衆生はどちらの世界にいても阿弥陀仏が教え説く法会の席についていることになる）が究極の現世的生死観の拠り所となる。阿弥陀国と衆生界が同一であるということは、われわれの娑婆世界、つまり現世が悟りの世界であることを意味し、往生することなく現世で救済されていることを意味する。一遍の思想を究極の現世的生死観とする根拠はそこにあつたのである。

一遍の思想、つまり現世的生死観は一遍自身が武士であり、名門の河野水軍の出自も手伝って当時の武士に素直に受け入れられたが、一遍が武士の精神的支柱である神祇信仰を彼の思想に積極的に取り入れた点がその理由の一つとも考えられる。一遍と武士の交渉は、豊後国の守護、大友兵庫頭頼泰、備前吉備津宮の神主の子、藤井某、信濃佐久郡の大井太郎、徳太寺の候人肥前前司貞泰、武蔵のあぢさか入道、伊予三島の地頭代平忠康らとの交渉があつたが、一遍の布教が遊行という移動形態をとつたため、短期間の交渉に終わった。したがって、本格的な武士との交渉は一遍亡き後の時宗教団の成立以降が中心となる。

中世も南北朝の時代になると、武士の交渉において、時衆の僧は陣僧という形態をとつた。陣僧は時衆に限らず他宗にも見られるが、『太平記』等の史料に頻繁に登場してくるのは時衆の僧であつた。陣僧とは出陣する武士に従う、いわゆる従軍僧である。彼らの活動内容は、戦傷者の手当てや、瀕死の武士に十念を与え、戦死者に念仏供養することがその主たるものであ

つた。今回は『太平記』巻第六「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」や『太平記』巻第二十「義貞自害事」を取り上げ、戦闘現場における陣僧の具体的な活動を検証し、その実態を明らかにする。後世の『異本小田原記』にも、陣僧が連歌で陣中の無聊を慰めたことが記されているが、時衆が室町幕府の同朋衆にその形態を変え、日本の芸能・文化の形成に大きな影響を与えた事実は、中世武士との交渉がその背景にあつたことと無縁ではないであろう。本発表においては、陣僧の芸能・文化活動については詳しく触れることはできないが、その方面も含めて今後の陣僧研究の課題の一つとしたい。

横川顕正と浄土教

和田 真二

本考は横川顕正教授の思想における、その浄土教方面に関する一考察を試みるものである。その前に教授が如何なる人であつたかについてごく簡単にふれておく必要がある。

年譜に従えば、明治三十七年大分県、真宗大谷派・善正寺に生まれた。長じて京都・大谷大学に学び、生涯の師、鈴木大拙・ビアトリクス両先生に逢い、足下で宗教学、大乘仏教学、英語を修め、昭和十五年五月、三十六歳で夭逝された。しかしながら大拙先生ご夫妻との関係は、単なる先生と学生の関係ではなかつた。大谷大学の一郷教授は「その先生を自己の生涯の学